

原乃卷

027  
381  
1



027  
381  
1

愛知女子  
第 11816 冊  
書 圖

三十四

11816  
276

橋 吾は津耳も外島すくふ我湯代ふり  
 多るはれはくさ北山の甚だ那も於津津は二并  
 居しつて成るやと平 蟬鳴橋とつたあや  
 海さくく水底ははく線かたさ可るはく  
 ふりさく 毎るく家くこく 木くはく  
 例ふはくかつくくくくくくくくくくくく  
 橋 山もさく平 あくはは山くくく  
 住系書くくくく事那く 橋くくく  
 今くくくくくく山あくく木橋山茂  
 のくくくくくくくくくくくくくくくく

うゝ彦候と一川中ふほ世の社中  
 風慮の一葉と若人の志ふ謀の志と詠  
 一々中鼻祖は重く祝とまき松の松ふ  
 玉久碑面ふ蟬鳴る詠と刻て千ふ載  
 ふ朽の正候と為玉市伴と幾平  
 免んるまじや難し候とて治こひをふ難と  
 持り翁ととたて難ふ故未は作難と  
 碑ふふ点と林出とて一形花言とドと  
 席一寸は作事とてう梨

あふれ二葉に夏 今夏城まはる



蟬 碑  
 蕉 翁 咏

夢水画

碑面句

軍よさる  
志入輝乃

次韻

歳終こそ佳くそ水も  
橋へ松の洞も佳く  
以て入神の窟もあ

楚竹  
一艸  
蘭丈

手廻りおもしろ  
牛車も佳く  
一そは月もつら  
花神も佳く

蓼水  
棠甫  
棠宇  
未可

各詠

蝉鳴や池邊もさ  
凡俗の今も  
あはれ日よち

加賀  
後  
甚化  
鉄舟  
免二

枕のやいさし原田を岸の  
 杉のささりし朝のぬけや松の  
 朽木をしのむるもささりし朝のぬけ  
 多きるりし朝のぬけをささりし朝のぬけ  
 切んこささりし朝のぬけをささりし朝のぬけ  
 纏抱く懐ぬえささりし朝のぬけ  
 吹雪や蒼の田舎をささりし朝のぬけ  
 倉之に松のぬけをささりし朝のぬけ  
 物干しや松のぬけをささりし朝のぬけ  
 多きるりし朝のぬけをささりし朝のぬけ

上田陸虎

眠帝

湖北

梅詞

草路

有来

如林

甫十

芦江

九弟

其一

多きて事のぬけをおもや松千の  
 何〜〜〜何れをぬけをおもや松千の  
 岸の〜〜〜風をぬけをおもや松千の  
 松の〜〜〜松をぬけをおもや松千の  
 多きるりし朝のぬけをささりし朝のぬけ  
 切んこささりし朝のぬけをささりし朝のぬけ  
 纏抱く懐ぬえささりし朝のぬけ  
 吹雪や蒼の田舎をささりし朝のぬけ  
 倉之に松のぬけをささりし朝のぬけ  
 物干しや松のぬけをささりし朝のぬけ  
 多きるりし朝のぬけをささりし朝のぬけ

高柳 一鳥

小諸 宜長

穴原 吟山

卷石

安機

春日 九河

東武 可一

岩村田 鶏山

熊谷 獨阿

神の物に背小解り——田螺の如  
 細川におもひ——遠くは石を中  
 駒貫の里に歩けりやまきれき  
 次引——路ふすすたれはり  
 五月雨に証並ふ像美水巾——  
 雪ふも右に官梅——しら那の糸  
 雪ふ下ろくや夕れ山をめぐり  
 葉梅の枝より交り——少路も本  
 けし物——風は鞭やちかふか  
 物居の言々——清月をうらやま

藤五

春室

牧羊

迂生

楚観

文仰

米宜

梅七

榮岩

葉把

昭月

新戒

梅のまやふ春吸へて通すこり  
 けし物上蛙啼はけれ朝月を  
 雙あつと馬亭出すやうと人の  
 志山の——朝月と志——程志堂  
 堂しあつてあつれやひくく虫  
 山川の形ふ散りささるり散  
 然へて——神——もも所居まの  
 初まやまのうふ森と人の影  
 清りまて人ふや——ふまの事  
 梅の口——まきれはり——と

深谷

素山

羅門

木人

處重

杉谷

孟川

知東

花繡

紫英

古吐

源山後中巖に抄れ少れ中  
 重く抄れひり文吾や水の上  
 以形より枝より句字枝枝を  
 夕くれや本陰とせこれ進出—  
 重れ布つと申も此もや枝尾も  
 鶏れ抄れくく小むせ小帳まの報  
 まるゝ初まのやぬこ長編を  
 二つ二つ豆の何れや本下宮  
 消ぬや〜小燈ぬや〜小帳まの  
 刈道の抄〜そよれ焚那〜か

倚派

舟媒

松堂

下道寺

河舟

上仁寺

眉半

本莊

一馬

女  
み川

卷耳

文指

可方

こ〜〜〜や因尚のま〜の飯〜守  
 ち〜れ〜や物小清〜ぬ〜ち〜ん風  
 狩人小舟の志れぬほ〜〜〜  
 達〜る〜ぬ〜ぬ〜〜〜  
 盡障か小〜〜の梅枝〜を  
 酒〜れ〜せ〜ぬ〜市〜の〜  
 笛の〜〜〜  
 赤子位疎の習念乃抄〜〜  
 ず〜〜〜  
 柳岸〜や夕日〜〜と盡の舟

其室

頼尾

小坂

松叟

ト全

如醉

柏葉

枝邦

其蝶

志計

素川

伊勢

うくひすやそ急回れなき朝朗  
 鐘撞の耳とあきくわねくま  
 卯の玉お下四束あふあ候うりり  
 一かき入夕此あきくわねあ哉  
 ありくす葉よの神舟中よ信  
 常より何あくあめこほまかり  
 涼一さやあふあふああの上  
 岸谷と名雷とつる口と神あり  
 狼乃一寐とら捨り枯舟とあ  
 去く満る橋れま豆やせりあ

鹿橋

素輪

素嵐

麦四

関根

素嵐

玉村

勇水

深谷

蝶阿

西牧

舟山

陸奥

兔墓

沙光  
市月

ぶくを廣の原とむかす  
 たり物あわくあきくわね仙花  
 まる舟小書あきくわね一ね  
 まる舟小書あきくわね一ね  
 わくね厚あきくわね神あきくわね  
 蝶一いちあきくわね一いちあきくわね  
 村のあきくわねの痛あきくわね  
 五務あきくわねあきくわね  
 雨のおやあきくわねあきくわね  
 葉あきくわねあきくわね

高崎

雨竹

安中

花笠

古屋

尺雨

交山

吾妻

雨鏡

文路

子明

未義

下毛中

添宿  
未素



赤袴を浴びてあはれかきしめて  
 仰ぐみくもや菅竹の切り子  
 五龍の切りにあはれかきしめて  
 わらわの膝裏にきしめて  
 水もれ立しりくはのくおき  
 巻巾清はくくくはのくおき  
 海にまはり又出でてはのくおき  
 名は東やあはれかきしめて  
 かゝぬ門おすくあはれかきしめて  
 梅をとりてあはれかきしめて

沼和田 沼古

勅使川 快馬

金久保 従席

五龍

支柳

少年 抜鳥

下仁田 爾未 聞駈

赤袴を浴びてあはれかきしめて  
 仰ぐみくもや菅竹の切り子  
 五龍の切りにあはれかきしめて  
 わらわの膝裏にきしめて  
 水もれ立しりくはのくおき  
 巻巾清はくくくはのくおき  
 海にまはり又出でてはのくおき  
 名は東やあはれかきしめて  
 かゝぬ門おすくあはれかきしめて  
 梅をとりてあはれかきしめて

奠測

女 鷺夕

雲水 和竹

東都 似鳩

七人 芋月

作者 麦雨

忠知 菊圖

はくし人の涙

葉梅おまゝのぬくまは夏の月  
 笑非や凡のゆゑも水はと  
 卯の舞に羅のまき舞して子供  
 杉杉もこれ一筆の妙門とてか  
 葉梅おまゝはふれ一体石  
 蜀魂やこれの舞やえまを  
 雲雀啼も并れりとの夕日東  
 春あつちや夕日こゝとせとて  
 ナ古泥やサアハわちとて常の病  
 せえつちや昔の病をいふ程の先

一州  
 松曉  
 湖餅  
 楚竹  
 文芝  
 葉甫  
 蓼水  
 葉文  
 其水  
 棠宇

春のち枝は春名百千も  
 榎千り物さくちおれを  
 名月や四壁の雲むしのと  
 白雲や晴れらの影すとい  
 夕やをれやふさふさり梅嫌  
 名くく个五更りちう玉あめの玉  
 葉小鐘撞人いささしいり  
 二三宵桐の本陰や後此月  
 摩道の眩る花散あられの報  
 てのまは少りとて月降ふま

竹浦  
 未可  
 帰一  
 車夕  
 未可  
 さく  
 棠宇  
 棠文  
 一州  
 實圓

乃南のまゝに藤原此堂のこれ  
かゝ勝りてふくくふに委かぬ  
さわりし中時を乃後時抄繪  
蘇親のまゝに小室一冬は月  
五の破りて小室へては冬を感  
くふに抄へて小室とありてふ

葛之  
松井  
松山  
蓼名

追加

い十と集や抄中一巻のまゝに

未可  
ね

名月やりりては常一  
と流中少故くは少水礎

松坂  
五達  
滄波

